

河頭太鼓橋の歴史的意義と岩永三五郎

The historical importance of Kogashirataikobashi, one of the bridges made by Sangorou IWANAGA.

原口 泉

By Izumi HARAGUCHI

要旨：鹿児島市の甲突川に架かる五つの石橋、150年にわたって鹿児島の歴史的景観を形作ってきた4連、5連の石橋群は、本年1997年1月までに完全撤去された。そして五大石橋と同時期に架けられた甲突川最後の石橋、河頭太鼓橋も本年秋から冬にかけて撤去される運びとなっている。本稿では、河頭太鼓橋の歴史的、文化的価値について論じつつ、石橋撤去の持つ意味を提起したい。

甲突川をさかのぼっていくと、鹿児島市街地を抜けた河頭地区に見事な石橋があります。晴れた日は川面にアーチを映し、近づいてみると、アーチ石や壁石の一つひとつが、実に丁寧に組み合わせられているのが分かります。この河頭太鼓橋は、いまから約150年前に造られ、貴重な文化遺産といってもいい石橋です。

河頭太鼓橋については、いくつかの視点から取り上げることができます。第一に、橋そのものの規模や、橋に見られる技術的な側面。第二には、史跡としての価値。そして第三に、岩永三五郎の作品の中における位置です。

1. 県下最大のアーチを誇る

まず最初に、河頭太鼓橋の規模についてですが、現在県内に残る江戸時代に造られた石橋の中では、アーチの大きさが一番大きいということです。

大乗院橋も、河頭太鼓橋以前に岩永三五郎が架けた橋です。この両者を比べてみると、アーチの大きさ、これを径間といいます、河頭太鼓橋は径間が15・8メートルあります。大乗院橋は12メートルです。いかにアーチが大きいかわかるでしょう。

*keyword:河頭太鼓橋、岩永三五郎、歴史的価値

**鹿児島大学法文学部

(〒891-12 鹿児島市花野光ヶ丘 1-14-10)

いまあげた数字は、鹿児島市の教育委員会発行の『鹿児島市文化財調査報告書』第4集(1987年)に記載してあるものです。



写真1 河頭太鼓橋(撮影:1986.3.9)

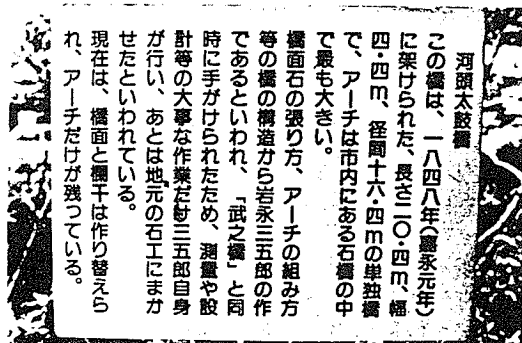


写真2 河頭太鼓橋の説明文(撮影:1986.3.9)

ほかに県下全域の石橋の一覧表があります。1) それを見ると、一つだけ河頭太鼓橋より大きい石橋が、財部町に現存しています。八カ代(やっかしろ)橋です(径間24・8メートル)。しかしこの橋は、大正14年に

造られたものです。江戸期の石橋では、まぎれもなく河頭太鼓橋が最大のアーチをもって甲突川本流に架かっているのです。

次に述べたいのは、甲突川五大石橋で駆使されている様々な技術が、河頭太鼓橋にも見られるということです。その一つが、壁石の扇形の積み方です。岩永三五郎が鹿児島で初めて試みた美しい扇形の積み方が、典型的に河頭太鼓橋には見られます。さらに、石だけを組み合わせでできた橋であって、つなぎを使っていないというところにも特徴があります。石灰とか粘土を使わない工法でできた石橋ということです。岩永三五郎は、場所によっては、石灰とか粘土を使って石を組み合わせた例があります。

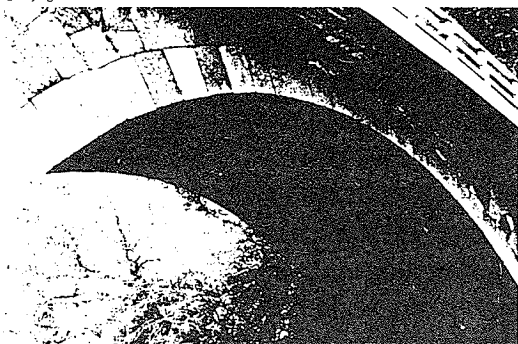


写真3 河頭太鼓橋(撮影:1986.3.9)



写真4 河頭太鼓橋(撮影:1986.3.9)

たとえば、指宿の二反田川の河口で行なった港湾工事です。貿易港として岩永三五郎が改修したのですが、潟口の船だまりの部分は、練り積みといわれる工法を採っています。鹿児島でたくさんとれる石灰、粘土を使っているのです。このように場所によっては練り積みも採用しているわけです。甲突川の石橋は、練り積みではなく、石を組み合わせで強度を確保しています。そして、その積み方が扇形なの

です。

昭和11年に出版された土木学会編纂の『明治以前日本土木史』の中には、鹿児島の欄を見ると、私たちが呼んでいる甲突川五大石橋ではなく、「甲突川に架せる六大石橋」と出ています。このことも、注目しなければならないと思います。私たちは、五大石橋と言い慣れています。しかし、六大石橋という言葉が土木学会が編纂した本で使われている。これは、河頭太鼓橋の土木遺産としての価値が、既に公的に認知されていたということです。ちなみに、この本は岩波書店から復刊されています(1973年)。

2. 肥後別路(郡山街道)に架かる橋

河頭太鼓橋が、歴史的にあるいは史跡としてのどの程度重要であるかについては、橋の位置と関わりがあります。

なぜ河頭太鼓橋と名付けられたかという、河頭という字にあるからです。河頭は甲突川の頭と理解された地名だと思います。『鹿児島縣地誌』という明治15年から17年に編纂された本の中に太鼓橋の記事があります。2) そこには、犬迫村と小山田村を結ぶ橋と書いてあります。そしてこのルートは、肥後別路(郡山街道)ということになります。肥後別路とは、九州街道(出水街道)の別路という意味です。

肥後別路は、河頭太鼓橋を渡って小山田に抜け、入来峠を越えて宮之城、大口、そして肥後に出る道です。したがって河頭太鼓橋も、交通の面から見て極めて重要な位置にあったということが出来ます。

五大石橋を一つずつあげると、武之橋はいわゆる谷山街道、指宿、山川につながる道にあります。高麗橋は、田上の方へ抜け、松元、伊集院へつながる道。西田橋は、九州街道、薩摩街道の起点としてよく知られています。新上橋は原良に抜ける道にありますが、この橋は五大石橋の中でも一番幅が広く、むしろダムのように洪水をせき止める、という意味合いが強かったと思います。その上流に玉江橋があります。玉江橋は玉里御殿につながる道ということで造られたと考えられますが、ここには、石橋以前には橋はありませんでした。

肥後別路の道筋は、新上橋を渡って城側から原良、鷹師の方に出て、甲突川右岸を通っていく。そして最後に河頭太鼓橋を渡って小山田の方へ抜ける。それが肥後別路だったと思います。

このように河頭太鼓橋は、肥後別路という薩摩国と肥後国を結ぶ重要な街道に架けられた石橋だと理解しなければなりません。また河頭太鼓橋の先には、郡山花尾神社があります。つまり、河頭太鼓橋は、藩主の参詣路、琉球使節も詣った道（「郡山街道」）に残された橋だということです。

それから、田上川を新川に付け替えるのが文化3年、1806年です。そしてその次に、伊敷と、西田、武、荒田をつなぐ石井手用水路が完成するのが、その7年後でした。³⁾ そのように薩摩藩は、治水工事を進めていったわけです。そして五大石橋を最終段階で造り上げた。そういう一連の治水工事として理解すべきです。

治水工事とも、街道とも結びついていたという理解のしかたが必要ではないかと思います。

3. 18世紀末の肥後と薩摩の技術

肥後の石工岩永三五郎が薩摩に呼ばれたということは、史実として間違いありません。では、肥後の技術は、どのような技術だったのでしょうか。

一説では、藤原林七という人が長崎に行ってオランダの工法を学び、それが岩永三五郎や橋本勘五郎らに伝わったと言われています。しかし、これについてはほとんど検証されず、誤った説が流布されてきたと私は考えます。

肥後の石工の発祥は、鹿本郡菊鹿町の仁平という人です。仁平は阿蘇郡の黒川に橋を架けろと藩から命ぜられ、長崎に行きました。長崎でアーチ石橋の工法を学ぶわけです。帰ってきた仁平は、1774年に手始めに菊鹿町に試作橋を造ります。それが、洞口橋といわれるものです。これは実用の橋ではありませんでした。次に、いよいよ黒川に黒川橋という石橋を架けることになります。「石虹」（石拱橋）とも呼ばれたようです。この橋が完成したのが、1782年です。試作橋から、8年後にできたわけです。⁴⁾

なぜ私が、18世紀の末にこだわるかといえば、

この時期が、実は薩摩藩でも石橋建造の一つのピークをなしていたと考えるからなのです。

現在県内で最古の石橋は、実方太鼓橋が流された今、市成街道に架かっている恒吉太鼓橋です。輝北町の市成郷に藩の牧場があるため、市成から恒吉への街道を藩は重要視したようです。この市成街道と永江川が交差しているところに架かっているのが、恒吉の太鼓橋です。この恒吉太鼓橋ができたのが、寛政2年、1790年です。

先ほどあげたは、実方太鼓橋は、吉野の「太鼓橋」として『大石兵六夢物語』に出てきます。この物語ができたのは1784年ですから、それ以前に実方太鼓橋ができていたということになります。寛永年間という説もあります。⁵⁾ これは、記録的には確かめることはできません。

仁平の黒川橋は1782年です。黒川橋は、昭和28年に流失しましたので、現在見ることはできませんが、1790年にできた馬が通るような立派な恒吉太鼓橋、あるいは実方太鼓橋と、黒川橋を比較する必要があるのではないかと私は考えています。

仁平が持ってきた技術と、それとは別の薩摩の石橋。少なくとも、18世紀の末、肥後と薩摩を比べた場合、吉野の実方太鼓橋が1784年以前に完成、恒吉太鼓橋1790年に完成、現存ということからみて、その当時、かなり高度な石橋築造の技術を薩摩藩は有していたと考えられます。肥後とは別に、薩摩には優れた技術があったわけです。

4. 最大級の技術者として招聘

さて、その肥後で生まれた石橋築造の技術は、どうなったのでしょうか。仁平は1790年に亡くなっています。三五郎が生まれたのは1793年です。仁平が亡くなって3年後です。仁平には四人の男子がいました。この仁平ならびに四人の息子たちが熊本に築いた石橋を見て育ったのが、三五郎だったのだらうと思います。

1819年には、三五郎が手掛けた柏川井手が完成しています。その3年後、1822年に建てられた八代郡龍峯城跡の石碑には、手永の大庄屋、代官と並んで「石工岩永三五郎」と、その名前が出てきます。このときすでに、岩永姓を与えられていたこ

とが分かります。仁平が長崎で学んできた石工の技術を、仁平が亡くなってから3年後に生まれた三五郎が、25歳になるまでに肥後で大成したと考えられます。

三五郎が薩摩に呼ばれたきっかけには、二説あります。多分、参勤交代の折り、天保改革を推進した関係者が雄亀滝橋などの成果を見て、三五郎の招聘を郡代に依頼したと見る説の方が、正しいのではないかと思います。歴史的記録としては、天保改革の実行責任者、海老原清熙の『薩藩天保度以後財政改革顛末書』があります。これは、海老原清熙が、明治17年に天保改革を回顧して記録した物です。

これ以外にはまずありません。明治17年に記録したものですから、年代に1、2年の違いはあります。この中に、岩永三五郎が肥後から呼ばれたということが書いてあります。

「石工岩永三五郎モ肥後ヨリ雇入タル（天保改革には、あちこちの技術者を薩摩藩は呼んでいる。その中の一人だということ）。以来、専ラ僕力手ニ付（僕とは海老原清熙）上町ニ宿シ（最初上町の稲荷川河口の石橋を築いたので）大工頭（これは相当偉い地位です。薩摩藩の大工の全部を統括する棟梁の頂点に立つ人ですから）阿蘇弥次右衛門ヲ接伴トシテ、朝夕指揮セシ事ナリ」と海老原清熙は書いているのです。⁶⁾

海老原清熙が上司であり、同僚として大工頭の阿蘇弥次右衛門こと阿蘇鉄矢が付けられたということです。このことは、最大級の技術者として薩摩藩に呼ばれたということを表しています。薩摩に来たのは、天保11年、1840年、岩永三五郎が47歳の時で、もっとも円熟して仕事ができる歳だったと思います。

三五郎が残したものは、薩摩藩の産業基盤としての港湾施設、新田開発など、数多くあります。しかし、最大のものは甲突五橋、むしろ甲突六橋と言った方がよいのですが、この石橋の築造です。

河頭太鼓橋の完成は1848年。この1848年には、天保の改革を推進した家老調所広郷が12月に江戸で自殺します。最大の保護者がいなくなり、明けて嘉永2年、1849年には、海老原清熙がお役御免になります。お由羅騒動というお家騒動で、藩内は大混乱におちいりました。彼を雇った人がい

なくなれば、帰るのはごく当たり前のことです。当然、三五郎は肥後に帰りました。

ここで、三五郎がいなくなったので風説が流れます。薩摩藩の秘密を知りすぎたので、彼は暗殺された。石橋物語の最たるものです。だいたい大規模な土木工事には、こうした伝説は必ず生まれます。川内市の長崎堤防では「人柱ケサ女伝説」が生まれています。こういう話がないと、人々が納得しなかったという面がある。大変な無理をした大土木工事ですから誰かが犠牲になったという、いわば「生け贄」が必要だったのでしょう。そして、規模が大きいほど、この「生け贄」の格が上がり、悲劇性が大きくなるという面もあります。

5. 三五郎最高の仕事、河頭太鼓橋

岩永三五郎とともに石橋築造に携わった地元の石工で、いわば師匠格の人もありました。山田龍助、川崎九兵衛、原田孫之進、田中源次郎です。この四人は三五郎の弟子でもあり、また三五郎の薩摩におけるパートナーと位置づけていい人達です。この四人とは別の位置に大工頭の阿蘇鉄矢がいたと考えられます。

原田孫之進、田中源次郎については分かっています。山田龍助は高麗橋、武之橋の棟梁とされています。川崎九兵衛は、武之橋の石工師です。⁷⁾ 築造の時期を考えると、武之橋と河頭太鼓橋は同じ1848年ですから、高麗橋の山田龍助、あるいは原田孫之進、田中源次郎、おそらくこの人たちが、河頭太鼓橋の指揮に当たったと考えられます。

このように、岩永三五郎の意をくみ、現場の責任者としての力量がある技術者が薩摩にいたということは、押さえておかなければなりません。もちろん、岩永三五郎も、肥後から、宇助、宇一、丈八（橋本勘五郎）などの優れた石工を連れてきています。実際あちこちの現場で、肥後の石工何人と記録が残っています。しかし、鹿児島にも彼らと同格の石工が育っていたのです。

河頭太鼓橋は、岩永三五郎が薩摩にいた最終段階の1848年に、薩摩の技術と肥後の完成された技術とがドッキングして出来上がった石橋でした。

先に触れたように、1849年になるとお家騒

動のため、それどころではありません。どんな人間でも調所広郷が急死し、自分達を雇っていた海老原清熙が辞職してしまった後に、落ち着いて仕事ができるとは考えられません。1848年は、武之橋とか、川内の江之口橋などと同じく、落ち着いて仕事のできた最後の年でした。ですから、河頭太鼓橋までは丁寧に造ることができたのではないかと思います。いわば、河頭太鼓橋は、岩永三五郎が手がけた本務の最後の橋なのです。

西田橋は7127両3歩2朱余という莫大なお金をかけています。しかし、美的にも遜色のない河頭太鼓橋が、たったの127両1歩余。⁸⁾河頭太鼓橋は岩盤の上に架けられています。たしかに、お金がかかる部分は基礎の部分だと思うのですが、それにしても、たったの127両というこの安さは、逆に注目に値すると思います。あれだけの石橋を、たったの127両で造れるまで、技術が進んでいたと解釈することができるのではないのでしょうか。

港湾工事の中に三五郎波止という防波堤がありましたが、現存しません。小村新田という開拓工事を行ないましたが、三五郎の手がけた部分は災害で決壊しています。災害で決壊したのはしかたがありません。しかし今、無事に残っている三五郎の本務としての作品は、河頭太鼓橋だけです。

6. 岩永三五郎が蒔いた種

三五郎は、優れた作品を鹿児島に残しただけではありませんでした。三五郎が蒔いた種は、非常に大きかったです。つまり、その後の鹿児島県の土木工事、産業基盤の整備は、岩永三五郎とともに天保の改革に携わった薩摩人、小野石工集団の第二世代によって担われていったということです。⁹⁾

この第二世代には、先ず福山権太郎、今村五郎がいます。福山権太郎は、明治14年に亡くなっています。権太郎は焼き石工法で知られ、川内川中流の大口市には権太郎石というものもあります。曾木川、川内川の開削に携わっています。兄は新右衛門という人で、川内川の開削をしています。二人目の小野石工、今村五郎は玉里邸の石塀を造った人です。

宝地三五郎もいます。そのころ小野石工の間では、岩永三五郎を偲んで、男の子に三五郎という名前を

付けるのが流行したそうです。

それに徳永三左衛門。この四人が小野の石切りの二代目とっていいと思います。

福山権太郎、今村五郎、宝地三五郎、徳永三左衛門。岩永三五郎の蒔いた種は、この二代目の四人から、三代目に引き継がれています。

有名な人では、小牧小三。この人が福山権太郎の一番弟子です。小牧建設の創業者弥之助さんの祖父にあたる人です。そして三代目の二人目が幸加木今助です。三人目が西三五郎です。この三五郎という名前も、三五郎を偲んで男の子に付けられたものだと思います。この三羽がらす、もっと沢山いたと思うのですが、あえて小牧小三、幸加木今助、西三五郎の三人を、小野石切りの三代目三羽がらすと呼んでおきたいと思います。

作品は、今でも見ることができます。県立博物館の考古館、これが彼らの作品で、明治16年にできています。そして小野の石切り四代目と続いています。

大正の初期までは、多くの石造建造物が造られています。明治中期から大正の初期まで、こうした石切りが大勢いたといわれています。名前をあげてみますと、畠中三左衛門、小牧弥之助、上福元長次郎、福山祐次郎、梶山助次郎、徳永直次郎、赤崎権助、徳重三左衛門、永留三左衛門、宝地浅吉…。県下に、明治中期は200名近く、大正の頃になると1000名に達したといわれます。県下に約1000名の石工がいたという華やかな時期を迎え、石工の組合もできています。その頃の作品に鹿児島県刑務所、鶴尾橋があります。二つともなくなりました。今でも見ることのできるのは鹿児島本港区の倉庫群、それからザビエル教会。そう見ると、岩永三五郎が蒔いた種というのは、とてつもなく大きかったと思います。

最後になりますが、ほとんどの鹿児島の石造文化は、三五郎が種を蒔いているということです。それを受け継いだのは小野の石切りである。二代目、三代目、四代目、大正時代まで続いた。そして現在に至っている。岩永三五郎が本務として他に煩わされずに造った最後の石橋、河頭太鼓橋は、「石造都市」鹿児島の原点ではなからうかと思っています。

冒頭に述べたように、この河頭太鼓橋のアーチの

大きさが、県内随一であるということも特筆すべきですし、五石橋と同様の技術が駆使されている。さらに、参勤交代の道ではないところにこれだけの石橋を造ったという驚くべきことは、西田橋とは逆の意味で特性があると思います。つまりあれだけ手をかけているということは、小野の人たちが自分たちの地元の石橋ということで、報酬も度外視して丁寧に造ったのではないかという気がします。

地元、故郷に架ける橋は、特別な思いを込めながら造ったのだろう。そういう思いがします。

参考文献

- 1) 『石造橋の保存に関する調査報告書（昭和 60 年度）』，鹿児島県教育委員会，1986 年 3 月
 - 2) 『鹿児島県地誌』上（鹿児島県史料集・第 16 集）
鹿児島県立図書館，1976 年 3 月
 - 3) 『鹿児島県維新前土木史』，鹿児島県土木部，1934 年 12 月
 - 4) 太田静六：『眼鏡橋』，理工図書，1980 年 10 月
 - 5) 前掲『鹿児島県維新前土木史』
 - 6) 本庄栄次郎，土屋喬雄，中村直勝，黒正巖共編：
『近世社会経済叢書』第 4 卷，改造社，大正 15 年 9 月．原文は鹿児島県立図書館所蔵『海老原清熙君身上ニ係ル件』より引用した．同資料は『財政改革類末書』とほぼ同内容である．
 - 7) 染川亨編：『鹿児島城下下荒田郷土史』，鹿児島市八幡尋常小学校創立 60 周年記念会発行，1936 年
 - 8) 宮之原源之丞：「御産物御仕登金銀錢御蔵納高萬控」，嘉永 2 年(1849 年)，鹿児島県立図書館所蔵
 - 9) 川野清治：「その後の三五郎」，『MBCクオーター』35 号，南日本放送，1970 年 1 月
- *河頭太鼓橋が、肥後別路に架かる橋であるとの指摘は、郷土史家平田信芳氏による。